

立花富と南信子の保護者へのお便りに見る保育観の考察

A Study of the view of Early Childhood Education in the Letter to Parents by
Tomi Tachibana and Nobuko Minami

熊田 凡子^{*、**}

要 約

本稿は、日本の昭和戦前及び戦時下のキリスト教主義幼稚園の保育者であった立花富と南信子らの記録、なかでも保護者宛のお便りの原史料に描かれている1人1人の子どもの育ちに対するまなざしやクラスの雰囲気、子どもたちが育とうとしている姿等を確認し、一次史料より彼女らの保育観を検討した。立花富と南信子は、子ども1人1人とクラス全体の観察力、及び子どもの育ちを理解することを基盤にした保育を行い、子どもの内面を自分事のように共感し保護者たちと喜び合おうとしていた姿勢を保ち続けていた。

キーワード：エピソード、観察力、子どもの内面、キリスト教主義幼稚園

1. 研究の課題

本稿では、キリスト教主義幼稚園である関西学院幼稚園の前身である聖和女子学院附属幼稚園(前・ランバス女学院附属幼稚園、現・関西学院幼稚園)における立花富と南信子らの記録、なかでも保護者へのお便りの原史料に描かれている1人1人の子どもの育ちに対するまなざしやクラスの雰囲気、子どもたちが育とうとしている姿等を提示し、保育者が保護者と共に子どもの育ちを喜び共有していた実態について触れてみたい。立花富(1904-1992)⁽¹⁾とは、ランバス女学院附属幼稚園の主任教師であり(1928年から1945年まで)、また日本の戦後のキリスト教保育の指導者であった南信子(1914-2003)⁽²⁾の恩師であり、立花富の保育観が南信子に継承されていったと言われる⁽³⁾。

立花富は、日本のキリスト教主義幼稚園におけるランバス女学院附属幼稚園ナースリー・スクールの導入と実践に携わり、進歩主義教育実践の先駆的事例を残した人物でもある。南信子は、1937(昭和12)年4月から1940(昭和15)年3月までランバス女学院で、立花富を中心にした教師陣たちから幼児教育を学び、卒業後岩国幼稚園(山口県)で2年間主任保姆を経験した。その後1942(昭和17)年4月より、日本メソジスト大阪鶴町教会にあった鶴町幼稚園で1年間主任保姆を担っている。さらに、立花と南は、1943(昭和18)年から1949(昭和24)年まで聖和女子学院附属聖和幼稚園で幼児教育に携わっている。

本稿では、立花富が南信子を指導し影響を与え、さらに共に保育に携わり形成してきた子どもの育ちを発見する、子どもの思いや考えを理解する、保育者自身を見つめ直す、保育者の使命を実感するといった保育者のまなざしが読み取れる保護者宛てのお便りを通して、保護者と共に分かち合おうとしていた保育者の姿勢を取り上げ、保育者と保護者が保育観を共有する意味について考え

2022年11月30日受付

* 江戸川大学 こどもコミュニケーション学科非常勤講師

** 関東学院大学教育学部こども発達学科准教授 教育原理・保育者論・カリキュラム論・保育内容人間関係・教職実践演習・教育実習指導Ⅰ・保育実習指導Ⅱ

てみたい。

なお、本稿は、熊田凡子『日本におけるキリスト教保育思想の継承—立花富、南信子、女性宣教師の史料を巡って』（教文館、2022年3月）において検討が不十分であった保護者宛の通知における保護者に対する視点、及び立花富の晩年の動向の不明点について調査と分析を行い加味することをも目的としている。

2. 日本の幼児教育界と立花富のランバス女学院におけるキリスト教幼児教育実践について

まず、ランバス女学院における立花富をはじめとするキリスト教幼児教育実践の系譜を確認しておきたい。

近代日本における幼児教育史では、これまで、幼稚園草創期から、官立幼稚園（1876年・東京女子師範学校附属幼稚園）と私立なかでもキリスト教主義幼稚園（1881年・桜井女学校附属幼稚園）の2系統の動き（保姆養成も含む）によるものとして認識されてきたが⁽⁴⁾、幼児教育を支える教育観や人間観においては、いずれに対しても女性宣教師らのキリスト教的精神が影響しており、日本人保育者らの実践によってもその精神が保たれているという視点が明らかにされてこなかった。しかし、1人1人の子どもを人格的に受け止め、心の内側から育つことを尊重するキリスト教的精神を基盤とした幼児教育や保姆養成が両者ともにおいて影響を与え、キリスト教主義幼稚園では継続されてきたのである。

また、女性宣教師らの教育・宣教活動に影響を受け自ら学んだ日本人保育者たちによる明治・大正・昭和前期に繋いできた教育と戦後の新教育の関係性については、断絶した教育として認識されていたが実は日本の幼児教育に先駆けていたのである⁽⁵⁾。この点については、立花富の教育実践が、デューイの経験主義⁽⁶⁾の基にM. クック (Margaret Melinda Cook, 1870-1958, 米国南メソジスト監督教会女性宣教師)⁽⁷⁾らによる幼児教育の実際として意図し表現したもので、アン・ピービー

(Anne Rosalind Peavy, 1896-1981, 1923年ランバス女学院着任)⁽⁸⁾らの指導による子どもの自由作業（ピービーの言う創造作業）であり、自由教育そのものであったということから言える⁽⁹⁾。そうしたランバス女学院における自由教育にいたる系譜については巻末資料・表1に示している。

今回取り上げる史料から見る日本人保育者立花富らの自由保育の実践過程は、ランバス女学院附属幼稚園における子どもの経験による創造的な活動・作業の展開の様子から、日本の進歩主義教育実践の先駆的事例の歴史的事実を示している。そうした貴重な実態を読み取ることができる一次史料のなかでも今回は保護者へのお便りから、彼女ら保育者たちの保育観について考えてみたい。

3. 本稿で取り扱う史料について

次に本稿で分析に用いる史料について説明することとする。

先述したように、立花富から南信子のキリスト教幼児教育の実践に至るまでは、表1年譜に示した教育実践が続いてきたということが分かる。つまり、女性宣教師M. クックらが広島女学校⁽¹⁰⁾からランバス女学院時代（1904年から1921年頃にかけて）に営んできた幼児教育を立花富が実践し、それを通じて南信子に継続させていったということが考えられる。

本稿は、立花富と南信子が1930年代から1940年代にかけてランバス女学院から聖和女子学院に移行される時期に、幼稚園教諭として日々の保育を振り返り保護者に当てたお便りに着目している。

そこで、まず、ランバス女学院附属幼稚園の教育実践について述べている立花富の記録であり、同窓会報として発信している通知を取り上げてみたい。この史料は、当時の自由作業の実際とナースリー・スクールの導入について、立花富が自由保育の成立過程を述べているものでもある。

次に、1943（昭和18）年度の聖和女子学院附属聖和幼稚園の『記念帖』『お便り』の中身を分析する。戦時下であった当時、立花富と南信子

立花富と南信子の保護者へのお便りに見る保育観の考察

表1・立花富とランバス女学院関連事項の年譜⁽²³⁾

西暦年	立花富事項(・ランバス女学院関連事項)	日本の幼児教育関連事項(法令・キリスト教教育関連事項を中心に)
1886	・広島女学院創立(砂本貞吉が広島女学会を創ることによって始まり、ランバスファミリーに協力を要請する。) ¹	・小学校令、中学校令、師範学校令公布(4月10日) ・英和幼稚園設立(現存する最古のキリスト教幼稚園、金沢)(10月)
1887	・砂本により英和女学校開業(2月10日)。 ・ゲーンズが英和女学校で教え始める(10月)。 ²	
1892	・英和女学校附属幼稚園開園(10.1)。	
1895	・英和女学校保母養成科開設(9月)。	
1896	・広島女学校と校名改称(3月)。	
1899		・幼稚園保育及設備規程制定(6月28日)。 ・私立学校令公布(8月3日)。 ・文部省訓令第12号公布。公認学校での宗教教育禁止(8月3日)。
1901	・ファンシー・C・マコーレーが保育にスキップを導入 ³ 。	
1904	・マーガレット・M・クック来日(2月3日)。 立花富:2月14日に生まれる。	
1906	・マコーレー離任帰国。 ・クックは、広島女学校保母養成科課長兼附属幼稚園主任となり、幼稚園・保育所の責任を担う。	・JKU(Japan Kindergarten Union)結成(8月)。
1907		・小学校令を改正し義務教育年限を4年から6年に延長(3月21日)。
1908	・保母養成科は保母師範科と改称(4月)。	・戊申詔書発布(10月13日)。
1909		・文部省、修身教育の重視と教育勅語・戊申詔書の徹底を直轄諸学校に訓令(9月13日)。
1910	・クック休暇帰米。	
1916	立花富:愛知県立第一高等女学校本科第一学年入学(4月)。	
1919	・第33回米国南メソジスト監督教会宣教部年会で広島女学校保母師範科と神戸のランバス記念伝道女学校の合同が決議され、直ちに設立準備委員会が組織される(11月4日)。	
1920	立花富:前掲校卒業(3月)。 立花富:名古屋私立金城女学校専攻科文科入学(4月)。	
1921	立花富:前掲校専攻科文科一年課程修了(3月)。 ・広島女学校保母師範科とランバス記念伝道女学校が合併し、ランバス女学院保育専修部となり大阪へ移転、開設(4月10日)。 広島女学校附属幼稚園はランバス女学院附属幼稚園として設立申請(10月1日)。	
1922	立花富:大阪市私立ランバス女学院保育専修部入学(4月)。 ・ランバス女学院附属幼稚園の設立許可を受け、正式に開園(2月23日)。	
1923	・ランバス女学院神学部を併設申請(2月10日)。	
1924	立花富:前掲校保育専修部卒業(3月)。	

は、時代をどのように見つめ、保護者と子どもの育ちを共有しようとしていたのだろうか。戦時下のキリスト教幼児教育の一実態にも触れ、考えてみたい。

本稿で用いる主な一次史料群は、キリスト教幼児教育の実態が詳しく綴られた『昭和十八年度聖和幼稚園第二回修了記念帖』（以下『記念帖』と記す）及び当時の保護者宛ての通知（以下『お便り』と記す）である。記念帖は北陸学院史料編纂室にのみ所蔵されている。当時の保育者立花富と南信子が行事や生活について子どもの描いた絵を用いて作成した記念アルバムである。お便りは、関西学院大学聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所蔵の、立花と南が残した当時の記録である。筆跡から、記念帖とお便りは両者が記したものであると分かる。1943年に立花富と南信子は共に幼児教育に携わった。

本稿では特に立花富の記録に見られる子ども1人1人の思いや行為等を詳細に描いた表現に注目し、検討したいと考えている。

前頁に示した立花富とその関連事項の年譜（表1）は、ランバス女学院（聖和女子学院）の系譜も含め、今回取り扱う史料の歴史的位置について確認できるため提示した。ランバス女学院をはじめキリスト教主義幼稚園における研究組織であったJ.K.U. (Japan Kindergarten Union)⁽¹¹⁾では、設立当初より、幼児教育を通して家庭との密接な連携を図り、育児や生活改善に関する講演や話し合いを行うことで、母親が子どもにより正しい理解と幼稚園の保育に関心を持ち、さらにキリスト教信仰の理解に至ることを目的に「母の会」が組織されることを各園で共有していた。ランバス女学院では、母親学級や母の会等で家庭との繋がりを大事にしていたと言われる⁽¹²⁾。本稿ではこうした実態に触れてみることにする。なお、これまで明らかにされていなかった立花富の戦後および晩年の動向については、立花富の略歴に加えている（本稿巻末に提示）。

4. 立花富、南信子らの記録より⁽¹³⁾

次に、ランバス女学院附属幼稚園（以下「ラン

バス幼稚園」と記す）におけるクックの時間割を廃した自由保育（自由製作の発案）（1912年）を、ピービーが实际的に指導し、日本人保育者立花富らによって体系的に定着させていった当時の記録に触れてみよう。まず、1928（昭和3）年から、本格的な自由作業による保育を実施し始めたことにより、子どもの自由作業（ピービーの言う創造作業）を中心にした、子どもの想像性を積極的に活かす自由保育が展開されていった記録である。ランバス幼稚園で立花富らが行った自由保育は、子どもの創作能力を社会生活の現実の中で発揮させていくものであったことが読み取れる。

(1). ありのままに詳細に記述する立花の綴り

自由作業を中心とした自由保育では、始めは3・4種類の積木・紙類・粘土・画等の材料から子どもが各自で好きな材料を選び、思い思いに何かを作る程度であったが、徐々に、子どもの方から「こんなことをしたい」「こんな材料がほしい」という目的のある要求が表われてきたと言う⁽¹⁴⁾。こうして、ランバス幼稚園の自由作業では、子どもたちが個別に製作したり、協同で木工に取り組んだり、ままごとに使用するエプロン作りをしたりする様子がみられるようになっていった。立花富は次のように記録に残している。

ランバス女学院幼稚園の近況

立花富子（1930年）⁽¹⁵⁾

総本山の近況をと煽てられ引き受けはしましたが、何がさて新しい子供が少しく慣れたと思へば、世はいつか六月だつた位の事、特筆する程の事もなく、期待されるにはあまり平凡すぎるのでありますが、兎も角時間表程度のもので発表致します。

然し之も鈴なし幼稚園で勿論臨機応変である事は御承知下さい。

毎朝お早うがすみ、荷物の整理を終へた小さい子供達が、第一に心を奪はれるのは砂場、鶏小屋、花畑等、戸外のもので、雨の降らぬ限り、小さい如露に飽きもせず、池の水を汲み入れ丹念に草花にかけ歩きます。亦藤棚の

下で一心に砂を叩いて喜んで居ります。

然し大きい組の子供達は、登園すると直ぐテーブルに着いて各々自分の仕事を考へます。家から予定をつくつて来た子供、途中で暗示を得て来た子供、友達に刺激された子供、みな何か目的を抱いて居り、各々好む材料を選んで、日数と時数とを問はず、完成するのに一生懸命努力するのであります。同一の製作が繰返されて、続く場合もちろんありますが、尚後から後から変化されて、面白く新しいものがずん～発表されて居ります。殊にその動機、進行、過程、結果等を観察する時、一層興味深いものがあります。日々一定して居りませんので断言出来ませんが、木で作られた舟、帆かけ舟、クレヨン染のテーブルクロス、ハンカチーフ、人形の着物、空箱、粘土の動物園の積木等が最近の仕事の例で、新しい子供達の間では粘土、畫、切紙類が喜んでなされて居ります。十時前室の整理をして朝の輪に一同揃ひます。これは極短く礼拝を主としたものであります。次はミルク手を洗つたり、机を拭いたりの準備から、後始末をし、口を洗つて休むまで凡そ四十分間、ベビークラスの子供達はそれから三十分程同窓室に床を延べてやすみます。会話は各組で十五分位、朝の仕事の批評、話、歌の発表等、後は陽の照る限り多く外遊をさせる様に致して居ります。最後の廿分はゲーム、リズム、金曜日にはお弁当なのでゆつくり音楽会、楽隊の遊びを致しますが、子供達は大喜びで、近来はラヂオの放送をしきりに真似て居ります。

新しい試みとして、檜垣先生の御好意により、一部の子供達に幼稚園で作つた營養料理のお辨当をはじめました。母の会員方の手助けもあり、結果もよいので来学期九月からは他の子供にも一斉にしてみたいと計画して居ります。

日々新しく動く幼稚園の一つ一つを挙げる事は不可能であり冗長に過ぎます。何れ何かの折々にお報せする事が出来ると思ひます。

五十余人の子供を三人の保姆が級別して受持つて居りますので、おもてなしは出来ませんが、どうぞお遊びにらして下さい善い處も悪い處も実演でお目にかけますから。

これは、立花が、「鈴なし幼稚園」となった「臨機応変」な日常を報告したものである。鈴で合図し時間を区切っていたこれまでの保育と異なり、年齢の低い子どもたちが「心を奪はれ」て「飽きもせず」自ら戸外で喜んで遊ぶことや、年齢の高い子どもは「各々自分の仕事を考へ」て自由作業に取り組む様子など、子どもの発達や特徴を踏まえて状況を述べている。子どもたち自らが「家から予定をつくつて来た」り、遊んでいる「途中で暗示を得」たり、「友達に刺激された」りする中で、自らの「何か目的を抱いて」、「材料を選んで」取り組むことができる活動であり、時には「繰返されて、続く場合も」あり、時間に捕われることなく、日々継続していく上で、さらに「面白く新しいもの」へと発展していく作業過程を大事にしていた立花の保育観が表れている記録でもある。立花は、ランバス幼稚園の教師たちと共に、自由作業における「動機、進行、過程、結果等を」（作業過程を）十分に「観察する」ことによって、子どもの興味を一層深く理解しようとしていた。このように1人1人の子どもの自由な発想から創り上げられた作品「木で作られた舟」、「帆かけ舟」、「クレヨン染のテーブルクロス」、「ハンカチーフ」、「人形の着物」などは、一般の幼稚園のように見栄えの良い製作品を持ち帰ることとは異なっていたが⁽¹⁶⁾、子どもの自らの動機、進行、過程、結果を尊重し、子どもの自発的な成長を支える立場で自由教育に携わっていたことが、特徴として認められていくのである。

次の記録にも、立花の自由保育における保育観・子ども観が読み取れる。

ランバス女学院附属幼稚園の近況

赤組 (1931)⁽¹⁷⁾

たつた八人の存在であるけど、1人々^{ママ}がその小さい身体に自分の要求を一ぱい充してゐ

て、一分の隙も教師に與へてくれない組である、さればこそ今田先生の研究室をとう〜占領して赤組の室にしてしまった。そして、私共は今赤組（最年少組）を幼稚園といふよりも寧ろナースリースクールといふものに近づけようと計画してゐる。日課を示すと、朝登園してより十時まで外遊十時より十時半までミルク、十時半より十一時まで会話 歌、リズム、十一時より十二時まで睡眠 十二時帰宅、お弁当は一週一回でこの日は正午に起き少し散歩し後お弁当、帰宅といふ順序である。

外遊には巡り臺、ジヤングルヂム、をくり返すもの、ブランコ、砂遊び、車押し、箱飛び、汽車、電車の遊び等が喜んでなされ、鶏小屋、鳩小屋、花壇にも多くの興味がそゝがれる、個々の生活から段々と団体の中に入る状態や、あらゆるものにぶつかつて自分の力を試してゆく様子、徐々に発達を示す筋肉運動等、観てみると非常に面白い。雨の日は粘土、積木、貼紙、彩色、絵本等自由に行動させてゐるが、こゝにもこの時代特有の例えば、畳紙を幾枚ものりで重ね合せて、おふとんだといふ程度の仕事が発表される。歌を唱ふ事、レコードを聴く事は、特に喜びリズムもはつきりと感じる様である。然しリズムはともすれば音楽にあわせると云ふより活動そのものを楽しむといふ方が強い。睡眠は同窓室に各自の家庭から持つて来た蒲団です。なれるまでの睡眠の時間は非常にむつかしい。然し一度習慣がつくと喜んで休む。寝つき方、臥床状態が亦家庭の習慣がよくあらはれる。殆んど子供はこの一時間を熟睡し正午のサイレンで起されるといそ〜と帰宅する。ほんとに無邪気であり、純心である。可愛い、ですねと人は云ふ。然しちつと子供達に接してみると可愛い、だけでは過されぬ大なる力が教師に迫って来るのを覚える。特別にもつと家庭と共力しもつと理想的な組を作つてみたいと願つてゐる。(立花富子)

ランバス女学院のナースリー・スクール⁽¹⁸⁾は、

聖和史等の学校史では、1931年4月に開設されたと言われる⁽¹⁹⁾。この記録は、「赤組（最年少組）を幼稚園といふよりも寧ろナースリースクールといふものに近づけようと計画し」導入した状況を述べ、書き手の立花の子どもに対する次のようなまなざしが含まれたものである。

例えば、立花は、「遊び等が喜んでなされ」、「鶏小屋、鳩小屋、花壇にも多くの興味がそゝがれる」というように子どもの内面の動きを捉え、「個々の生活から段々と団体の中に入る状態や、あらゆるものにぶつかつて自分の力を試してゆく様子、徐々に発達を示す筋肉運動等、」をよく観察し、1人1人の発達に即した生活を理解し、子ども集団の中で子ども自身が自己を確立していく成長を把握していた。また、「雨の日は粘土、積木、貼紙、彩色、絵本等自由に行動させてゐるが、こゝにもこの時代特有の例えば、畳紙を幾枚ものりで重ね合せて、おふとんだといふ程度の仕事が発表され」、「歌を唱ふ事、レコードを聴く事は、特に喜びリズムもはつきりと感じる様である」ように、日々の関わりから子どもの内なる要求を受けとめ、子どもの思いが連続し表現されていく実践を展開させていた。つまり、立花の実践は、子どもの発達の理解を基盤とした見方による教育であった。

さらに、立花は、「たつた八人の存在であるけど、1人々がその小さい身体に自分の要求を一ぱい充てて、一分の隙も教師に與へてくれない組である、さればこそ今田先生の研究室をとう〜占領して赤組の室にしてしまった」という出来事を取り上げ、子どもは「ほんとに無邪気であり、純心である。可愛い、ですねと人は云ふ。然しちつと子供達に接してみると可愛い、だけでは過されぬ大なる力が教師に迫って来るのを覚え」、子どもの内に秘めた潜在的な能力（可能性）が備わっていることを認識していたということが分かる。

(2) お便りに見る1人1人の物語性と描写性

(a) 子どもの1人1人のエピソード (図1)

次に、先述でも紹介したが、ランバス女学院で

幼児教育を学び、後に聖和女子学院附属幼稚園（以下「聖和幼稚園」と記す）で、恩師立花と保育を共に担った南信子の記録にも触れてみたい。今回は、1943（昭和18）年度の聖和幼稚園のキリスト教幼児教育の一実態が記された一次史料を用いることとする。1943年度の聖和幼稚園の教育内容は、「国民儀礼、君が代、神社参拝」などの国家主義教育の形式は見られるが、「収穫感謝、降誕節礼拝」などのキリスト教暦の行事があったことは確認されている。当時の幼児教育界には戦時体制の要請はなかったにもかかわらず、基督教保育連盟（現・キリスト教保育連盟）は敢えてこれを通達し、国家への協力姿勢を示していた。それは、キリスト教幼児教育を続けていく上で、受け入れざるをえないという当時の基督教保育連盟の判断によるものであった⁽²⁰⁾。

そうした戦時体制に対応せざるを得なかった中であつたが、今回用いる1943（昭和18）年度の一次史料の『お便り』の分析によれば、聖和幼稚園の日々の営みの中では、キリスト教行事に限らず、詳細な記録を残されていることが分かる。この当時、園児の保護者に伝えていたことが、『お便り』（図1）や『昭和十八年度 聖和幼稚園第2回修了記念帖』（図2）（以下「記念帖」と記す）から鮮明に伝わってくる。

次の『お便り』は南信子を書いたものである。（一部を引用し、史料に書かれた当時の在園児の氏名（固有名詞）については、本稿ではアルファベットにて表記する。）⁽²¹⁾

（前略）楽しみにしてゐたお節句の日は雨がじゃん〜降つて山の学校へゆくのが大変でしたね。ねんどみたい道ですべりそうでした。でも元気な子は平気で山にのぼつて幼稚園よりもつと〜大きい学校で遊びました。TSさんの桃太郎さんはピカ〜のキモノで鬼ヶ島にせめていつたら、こわい顔した鬼がすぐ降参してしまひましたね。でもお面をとつたら優しいTMちゃんやWRさんやMちゃん、Yちゃんの鬼でした。かわい、おばあさんはKHちゃん、おぢいさんはKKさ

ん、そしてあの日は犬のONさんの一人で活躍しましたね。いつのまにか皆劇まで出来るようになってしまひました。そう〜あの日は美味しい〜御馳走が出ましたネ。

それからもつと〜楽しい事がいっぱいありました。二つすべるところのあるすべり台ができて一日に五十ぺんもすべつた人がありました。雨の降る日はそつと窓からすべり台を眺めてゐたのはAさんTちゃんMさんNさんSさん達でしたね。そう〜TさんSさんは、すべり台で阪急電車のまねをするのが大好き。二人は園田から毎日通つてゐるものね。（後略）

夏休みを前に1学期を振り返つた『お便り』は、「TSさんの桃太郎さんはピカ〜のキモノで鬼ヶ島にせめていつたら、こわい顔した鬼がすぐ降参してしまひましたね。」「かわい、おばあさんはKHちゃん、おぢいさんはKKさん、そしてあの日は犬のONさんの一人で活躍しましたね。」とあるように、子ども1人1人の出来事や思いに関するエピソードをまるで個々に語りかけるような調子で詳細に記録している。固有名詞を用いて、共感しながら、保育者の思いをのせて幼児の内面へのまなざしが記述されている。「雨の降る日はそつと窓からすべり台を眺めてゐたのはAさんTちゃんMさんNさんSさん達でした



図1・「セイワヨウチエン」(夏休み前の保護者宛お便り)
出典：関西学院聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所蔵

ね。」などと、誰が何に関心を持ち、どのような気持ちで、何をしたいのか、どのような表情で、何に出会いどのようなきっかけで、どのような動きで等、個々の具体的な場面や情景を綴っていることが特徴である。

(b)子どもの内側の思いを鮮明に映し出すエピソードの記述 (図2)

さらに、『記念帖』には、子どもらが楽しみにしていたお弁当持参日の情景を詳細に描かれている。その時々子ども心の内側から湧き出てくる思いが鮮明に映し出されてくるような場面もある。『記念帖』とは、当時の園児が卒園記念に園児に配付された記念アルバムと記録である。この当時1943(昭和18)年は、戦時下の影響があったためか、写真は使用されず、教師や園児が描いた絵が用いられている。図2の「オベントウ」の記事は、立花富が記録したものである。

マイシウークワイノオベントウノヒハ ミンナ
ウレシクテ ソレハソレハ タイヘンデ
シタ。ナンドモナンドモ オベントウヲノゾ
キニクルヒトガアリマシタヨ。キレイナオイ
シソウナオベントウヲ ミンナデソロットイ
タダクトキニハイツデモ イツシヤウケンメ
イツクツテ クダサツタ オウチノヒトダチ

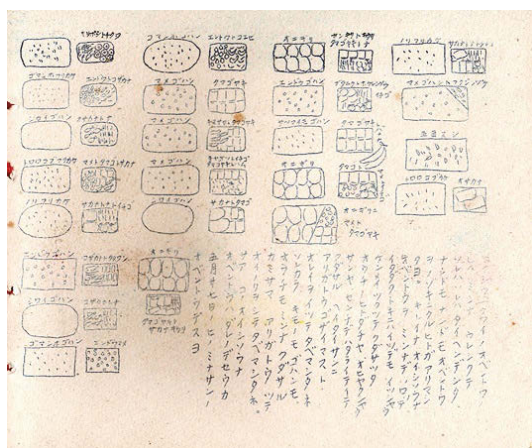


図2・「オベントウ」『昭和十八年度 聖和幼稚園第2回 修了記念帖』

出典：出典：北陸学院史料編纂室所蔵

ヤ オヒヤクシヤウサンヤ センチデハタラ
イテイテクダサル ヘイタイサンニ アリガ
トウゴザイマスト オレイライツテ タベマ
シタネ ソレカラ キモノモ ゴハンモ オ
ウチモ ミンナ クダサル カミサマ アリ
ガトウ ツテ オイノリヲ シテタベマシタ
ネ。サアコノオイシソウナ オベントウハ
ダレノデセウカ 五月廿七日ノヒノ ミナサ
ンノ オベントウデスヨ

これは、「マイシウークワイノオベントウノヒハ ミンナ ウレシクテ ソレハソレハ タイヘンデシタ。ナンドモナンドモ オベントウヲノゾキニクルヒトガアリマシタヨ。(毎週1回のお弁当の日は、みんな嬉しくて、それはそれは大変でした。何度も何度もお弁当を覗きに人がありましたよ。)」と、子どもの嬉しさが動作や表情となり表れ、その気持ちに共感し、子どもたちの集団の成長の様子や雰囲気を描き出したエピソードである。子どもらが、「お弁当を作ってくださいました人」、「お百姓さん」、「戦地で働く兵隊さん」、「また、着物も、ご飯も、お家も、みんなくださる神様」に対する感謝を祈っていた戦時下のキリスト教主義幼稚園の実態を記録に残しているものでもある。また、この記録では、1人1人の子どものお弁当の中身を描写し内容を記しており、「マメゴハン」「イモゴハン」など戦時下の生活状況を映し出されている。このような中でも、1人1人の子どもの内側にある喜びを大事にした立花の姿勢がうかがえる。

こうしたエピソードの記述より、立花富や南信子は、戦時体制による規制があっても、ありのままに内面が表れることを尊重し、子どもの姿に寄り添っていたと考えられる。

まとめ

本稿では、聖和女子学院附属幼稚園における立花富と南信子らの記録、なかでも保護者宛のお便りの原史料に描かれている1人1人の子どもの育ちに対するまなざしやクラスの雰囲気、子どもた

ちが育とうとしている姿等を一次史料から確認した。立花富と南信子は、子ども1人1人とクラス全体の観察力、及び子どもの育ちを理解することを基盤にした保育を行い、子どもの内面を自分事のように共感し保護者たちと喜び合おうとしていた姿勢を保ち続けていたことが以下の3点より検討できた。

第一に、子どもの自発的な成長過程を尊重している点である。ナースリー・スクール導入時では、立花富は、自由作業における子ども自らの動機、進行、過程、結果を見つめ、集団の中で子ども自身が自己を確立していく姿を「大なる力」として認識していた。

第二に、子どもの1人1人の出来事や思いに感心していた点である。立花富と南信子は誰が何に関心を持ち、どのような気持ちで、何をしたいのか、どのような表情で、何に出会いどのようなきっかけで、どのような動きで等、個々の具体的な場面や情景をエピソードにし保護者に伝えていた。このような保育観は、立花から教え子であり同僚であった南にも継承されていた。個々の固有名詞を用いて1人1人の子どものエピソードを記述するといった園児の個別性を重視していた点は、キリスト教主義幼稚園の実践の中で、女性宣教師から受け継がれてきたことである⁽²²⁾。

第三に、子どもたちが成長する様子や雰囲気に寄り添って、子どもの内面を大事にし、保育者や子ども、保護者に伝えていたことである。たとえ戦時下という規制があった時代であっても、1人1人のお弁当の喜びを詳細に記載し、共有しようと記念帖に記録していた。

このように、立花富と南信子の記録においては、園児1人1人のエピソードや保育者の思いや考えが描かれていること、写真や、また戦時下では保育者の絵画による情景が示されていること等を確認した。つまり、この当時の立花富と南信子は保護者と子どもの育ちを共有し合って、共に育てる、育ち合う喜びを分かち合おうとしていたということが検討できた。そうした保育観（まなざし）は、その後のキリスト教幼児教育に継承されていったのではなからうか。

付記

本稿は、関東学院大学人間環境学会助成「日本におけるキリスト教保育実践者立花富に関する史的研究」(2204-3.1a) (研究代表者 熊田凡子) 及び、科学研究費基盤研究(C) (一般)「昭和戦前から戦後の日本での女性宣教師の教育活動の継続性と歴史的意義に関する研究」(課題番号 21K02270) (研究代表者 熊田凡子) による研究内容の一部である。

《注》

- (1) 立花富は、1922年4月から1923年3月までランパス女学院保育専修部に学んでいる。卒業後は、広島女学院附属鷹匠町保育園の保姆として勤務し、1927年にはランパス女学院附属幼稚園保姆に、翌年主任保姆となった。
- (2) 南信子は、北陸学院保育短期大学の創設(1950年)に関わり、1950年から1990年まで、北陸学院保育短期大学(後に北陸学院短期大学保育科)で、幼児教育学を中心に教育実践及び研究活動に携り、石川県の保育者養成の指導的役割を担った。その他、1969年から1995年まで、金沢大学教育学部「育児学」非常勤講師として教鞭をとった経歴がある。
- (3) 熊田凡子『日本におけるキリスト教保育思想の継承—立花富、南信子、女性宣教師の史料を巡って』(教文館、2022年3月)参照。本稿は、本書で提示された立花富に関する史料データベースより、保護者宛の通知を取り上げて検討するものである。
- (4) 永井優美『近代日本保育者養成史の研究—キリスト教系保姆養成機関を中心に—』風間書房、2016年、15頁。
- (5) 日本の幼稚園教育界では、大正末期の初めての勅令である「幼稚園令」(1926年、戦後「学校教育法」(1947年3月)制定により廃止)から、戦後は学校教育法第79条に基づき、『保育要領』を編集し、幼稚園の教師のみならず保育所の保姆や父母に対する手引きとともに「楽しい幼児の経験」を列挙し、幼児の自発的な遊びを重んじた点などを示し、低迷していた幼児教育界に新風を吹き込んだ、と言われる。このように、戦後の民主教育思想によって定められた『保育要領』に基づく幼児教育は、戦後の新しい幼児教育を志向するものとして受容されてきた。しかし、この戦後新教育は必ずしもアメリカの直輸入ではなく、日本の先覚者たちの研究や実践と共通なものを持っていたのである。それは戦前から展開されていた、幼児のありのままの生活を尊重し自発的な活動を重んじる倉橋惣三(1882-1955)らの保育実践及び思想(1935年)によるものと認識されてきた。ところが他方で、女性宣教師らが発展させてきたキリスト教幼児教育が継続してきたことについては触れられてこなかったのである。こ

- の点については指摘されつつある（熊田前掲書 45-74 頁（第 1 章））。
- (6) 進歩主義教育とは、20 世紀初頭に、読み書き数えるなどの訓練や伝統的教科内容の一方向的注入を計る旧来の教育を批判し、子どもの興味や自発的活動を尊重する立場から学校教育の改革を求めて展開された、アメリカにおける教育改革運動・実践とそれを支えた理念の総称をさす。この名称は 1919 年に COBB, S (カップ) を中心に設立された進歩主義教育協会 (PROGRESSIVE EDUCATION ASSOCIATION) に由来する。PEA はその綱領草案のなかで、1) 全ての子どもの自然に発達する自由、2) あらゆる活動の動機としての興味、3) ガイドとしての教師、4) 児童の発達の科学的研究、5) 子どもの身体的発達に影響する全ての事柄の重視、6) 学校と家庭との協力、7) 教育運動指導者としての進歩主義学校、と主張する。進歩主義教育は、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて欧米諸国を中心に広がった新教育運動の系譜をくむもので、アメリカにおける中心人物であったデューイ (Dewey, J. 1859-1952) やキルパトリック (Kilpatrick, W.H. 1871-1965) らの実践や理論が源流となっている。こうした運動によってアメリカで設立された進歩主義幼稚園は、当時ピーボディ (Peabody, E.P. 1804-1894) やブロー (Blow, S.E. 1843-1916) らにより普及した恩物中心のフレーベル主義の保育を展開していたことを批判する立場にあったが、むしろ、フレーベルの精神に立ち返り、遊びを中心とした子どもの生活経験から幼児教育を考え実践することを主張したのである。本稿で用いる進歩主義教育とは、こうした意味を含むものである。（『現代教育学事典』労働旬報社、1988 年、453 頁・森上史朗・柏女霊峰編『保育用語辞典 [第 8 版]』ミネルヴァ書房、2015 年、403 頁・谷田貝公昭編『新版・保育用語辞典』一藝社、2016 年、233-234 頁参照。）
- (7) マーガレット・M・クック (Margaret Millikan Cook: 1870-1958) は、米国ジョージア州にてメソジスト教会牧師家庭に生まれる。初等教育専門のアトランタ保母師範学校 (幼稚園師範学校) を卒業後、ニューヨークの幼稚園で教師をしていた頃、ゲーンズと出会い、1904 年に来日した。クックは、保母の養成に努める傍ら附属幼稚園主任となり、広島女学校が併設する幼稚園・保育所全ての責任を持ち、母親たちの指導にもあたった。また、保母養成科の生徒たちに「日曜学校教授法」を講義した。休暇帰米の際にコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに学び、再来日後、1913 年、J.K.U. の会長に選出された。常に幼児教育界の動向に注意し、デューイらの進歩主義教育をいち早く取り入れた。保母師範科の大阪移転、ランバス女学院の設立時には準備委員として、また院長が決定するまでの 3 年間に責任者として学院の維持運営にあたった。（聖和史刊行委員会編『Thy Will Be Done 聖和の 128 年』学校法人関西学院、2015 年、106 頁参照。）
- (8) アン・R・ピービー (Anne Rosalind Peavy: 1896-1981) は、1896 年 8 月 24 日ジョージア州バイロンに生まれる。1918 年から 1922 年までフロリダ州ウエスト・タンパの国内宣教事業ロサ・ウォルデス・セスルメントにおいて教師。1923 年 8 月に来日し、ランバス女学院に着任。クックの辞任に際して、1938 年保育専修部部長に就任。ランバス女学院附属幼稚園の責任を持ち、特に 3 歳児の重要性に着目して、幼稚園にナースリースクール (年少) を設けて指導にあたった。第二次世界大戦中は、1941 年から 1942 年までテネシー州ナッシュビルのセンチナリー・インスティテュート・コミュニティ・センターにおいて、1942 年から 1945 年までアリゾナ州ボストンのコロラド・リヴァー日系米人強制収容所において幼稚園教師、1945 年から 1947 年までカリフォルニア州ロスアンジェルス市のセンチナリー日本人メソジスト教会の宗教教育主事を務める。戦後、1947 年 1 月に日本へ再着任、1947 年から 1963 年聖和女子学院、聖和短期大学において「社会知識」などの科目を担当し、自由保育の実践のために尽くす（『Thy Will Be Done 聖和の 128 年』212 頁）。
- (9) 熊田前掲書、75-96 頁、129-170 頁（第 2 章・第 3 章）参照。
- (10) 砂本貞吉は、日本の女子教育に携わる専従の女性宣教師の派遣の要望をし、W.R ランバスの仲介によって、米国南メソジスト教会伝道局より、ゲーンズ (Nannie Bett Gaines (本名 Anne Elizabeth Gaines) 1860-1932) (呼称) が派遣され、1887 年に赴任した。ゲーンズは、幼稚園について深い関心を抱いていたが、校舎の問題をはじめ、多くの問題が山積みし、なかなか手がけるまでには至らなかった。しかし、1891 年 4 月、ゲーンズの下に、公立小学校の校長が訪れ、市内で唯一の幼稚園が資金難で閉園するため、広島英和女学校が幼稚園を開くなら約 70 名の園児を送るということを告げたのである。この出来事によって、ゲーンズは幼稚園開設を決意したと言われている。（聖和保育史刊行委員会編『聖和保育史』聖和大学、1985 年、25 頁。）
- (11) 1906 年、教会や学校に付設されたキリスト教幼児教育施設の教育充実のために、キリスト教幼児教育に関っていた外国人女性宣教師らが軽井沢で立ち上げた協議会組織。現在のキリスト教保育連盟の前身。初代会長、頌栄保母伝習所の A・L・ハウ。
- (12) 前掲『聖和保育史』107-118 頁。
- (13) 本稿で「自由保育」の表記については、「自由保育」の全般的な概念や「自由保育」を確立して

いく形成過程を述べる上で、総称「自由保育」として用いる。一方、キリスト教主義幼稚園における進歩主義教育の実践、特に教育実践について言及する場合は、「キリスト教幼児教育」及び「自由教育」と表記する。

「保育者」、「教師」等の表記については、基本的に「保育者」を用いる。女性宣教師の場合は「教師」と表記する。

- (14) 前掲『聖和保育史』151-152頁。
- (15) 立花富子「ランバス女学院幼稚園の近況」『ランバス女学院同窓会誌』1930年、47-48頁。
- (16) 親たちにとって幼児の自由な絵や作品の意義をよく理解して受けとめてもらうことも困難なことのひとつであった。他園のように美しく完成された絵や作品が家に持ちかえられることは少なかったからである。この自由作業については、親たちからばかりでなく内外専門家たちからの批判もあったが、とにかくこれがランバス幼稚園の特徴として認められていくようになる(『聖和保育史』153-154頁)。
- (17) 立花富子「ランバス女学院幼稚園の近況 赤組」『ランバス女学院同窓会誌』1931年、55-56頁。
- (18) ナースリー・スクールとは、幼稚園に入るまでの幼稚園の前段階の教育機関として、戦前の日本において、欧米のナースリー・スクールを日本で実現しようと主に米国婦人宣教師の指導によっていくつか設立された。その中には、貧しい地域において福祉的側面が意図としたものと、保母養成学校や研究所などに付設された教育的側面から子どもの発達や幼児研究を意図として設立されたものがあり、貧富や階級の差を越えすべての子どもを対象に望ましい保育環境を与えることが目的であったとされる。ランバス幼稚園におけるナースリー・スクールは、ランバス幼稚園において1931(昭和6)年より開設され1941(昭和16)年の大阪から西宮の現在地に移動するまで続き、ピービーが主に指導に当たった。託児所としてではなく、人間形成の上で最も重要な2・3歳児の教育を医学的・心理学的・教育的な視点から子どもを中心に少人数の保育である。ランバス幼稚園のナースリー・スクールは教育的施設として、教師が子どもの健康と習慣や性質などに留意し幼稚園と母親と子どもと一体になり学び研究を重ね、子どもの人格の土台を形成しようとされていた。ランバス幼稚園のナースリー・スクールの目的は、第一に一人ひとりの子どもの全人的円満発達をはかることと、第二に父母教育の重要性にあるとして、行われていたのである。(『聖和幼稚園100年史』36頁、『聖和保育史』156-158頁、キリスト教保育連盟百年史編集委員会編『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟、1986年、204-207頁を参照。)
- (19) 前場『聖和保育史』156-158頁。聖和幼稚園

100年史委員会編『聖和幼稚園100年史』聖和大学1991年、36頁。

- (20) 1941(昭和16)年の記録によれば、「戦時体制はますますきびしく、諸事統制の時局に当たって、キリスト教に対する風あたりも強く、ところによっては園の中に神棚・御真影を備えることを強制され、礼拝も公然とできないという状態など、次々と情報を得、連盟本部はいかにして地方の園を守り、戦時下のキリスト教幼児教育の具体的な問題について指導するかについて協議し、文書でさしきわめることは、できるだけ機会を利用して伝達するなど苦心を重ねた。」と当時の役員会の状況が分かる(『日本キリスト教教育八十年史』170頁)。これらの事情から、「昭和17年3月7日付」の通達に至ったと思われる。
- (21) 本史料は、「子どもの個人に関する研究ではなく、保育者の視点を分析する史料として提示し使用する」、ということ所蔵先に了承の上使用しているが、当時在園児の氏名については、アルファベットにて表記した。
- (22) 女性宣教師の記録は、地域の情景や出会った人々1人1人の思いや考えなど、詳細にエピソードで表している特徴がある。(熊田凡子・辻直人「米国長老教会宣教師アイリン・ライザーのキリスト教教育観—戦前期の活動記録から—」『キリスト教教育論集』第25号、日本キリスト教教育学会、2017年、30頁・熊田凡子「北陸地域に女性宣教師の果たした役割」『キリスト教史学』第73集、キリスト教史学会、2019年、85頁。)
- (23) 立花富事項については、立花富「履歴書」(1941年6月7日付)(聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所収)の内容をそのまま記載し、戦後の動向については、立花富略歴(西南女学院短期大学資料室所収)の内容を参照した。
- ランバス女学院及び附属幼稚園の関連事項については、『Thy Will Be Done 聖和の128年』(第1部「第1章神戸女子神学校1880-1941」,「第2章広島女学校保母師範科1886-1921」,「第3章ランバス記念伝道女学校1888-1921」,「第4章ランバス女学院1921-1941」,「第5章聖和女子学院1941-1950」),及び『日本キリスト教教育百年史』450-466頁(「略年表」)を参照した。ランバス女学院附属幼稚園(1933年~1938年)の組織については、一次史料「ランバス幼稚園記念帖」の記載事項を引用した。
- 日本の幼児教育関連事項については、『幼稚園教育百年史』(457-490頁),『北陸学院百年史』(737-754頁)を参照。キリスト教教育・保育関連事項については、『日本キリスト教教育八十年史』(303-308頁),『日本キリスト教教育百年史』(450-466頁),『日本基督教幼稚園史』(4頁),『キリスト教学校教育同盟百年史』(375-387頁),『キリスト教学校教育同盟百年史 年表』(7-39

頁)を参照しまとめた。

表1・1 アメリカ・南メソジスト監督教会宣教師メアリー・I・ランバス (Mary Isabella Lambuth: 1832-1904), J・W・ランバス (James William Lambuth: 1830-1892), W・R・ランバス (Walter Russell Lambuth: 1854-1921)。メアリー・I・ランバスは、「神戸婦人伝道学校」(1888-1913) (後のランバス記念伝道女学校 (1913-1921)) 初代校長で、J・W・ランバスの妻。神戸美以教会初代牧師はW・R・ランバス、2代目牧師はJ・W・ランバス (『Thy Will Be Done 聖和の128年』87頁)。

表1・2 アメリカ・南メソジスト監督教会女性宣教師ナニー・ベット・ゲーンズ (Nannie Bett Gaines: 1860-1932) は、1887年10月12日、広島に到着し翌日より広島英和女学校で教え始める。1891年地元の要請を受けて幼稚園を開設する。1895年には保姆養成科を設置する (『Thy Will Be Done 聖和の128年』87頁)。

表1・3 F.C.マコーレ (Fannie C. Macaulay, 1863-1941) は米国・ケンタッキー州に生まれる。1901年、宣教師としてではなく、P.S.ヒルの下で指導を受けた幼児教育の専門家として来日。広島女学校任期を1年延長してまで (在任期間1901-1905)、師範科や幼稚園のために保育を指導した。

引用・参考文献

熊田凡子『日本におけるキリスト教保育思想の継承—立花富、南信子、女性宣教師の史料を巡って』教文館、2022年。
熊田凡子・辻直人「米国長老教会宣教師アイリン・ライザーのキリスト教教育観—戦前期の活動記録から—」『キリスト教教育論集』第25号、日本キリ

スト教教育学会、2017年。

熊田凡子「北陸地域に女性宣教師の果たした役割」『キリスト教史学』第73集、キリスト教史学会、2019年。

立花富子「ランバス女学院幼稚園の近況」『ランバス女学院同窓会誌』1930年。

立花富子「ランバス女学院幼稚園の近況 赤組」『ランバス女学院同窓会誌』1931年。

基督教保育連盟編『日本基督教幼稚園史』基督教保育連盟、1941年。

基督教保育連盟編『日本キリスト教保育八十年史』基督教保育連盟、1966年。

キリスト教保育連盟百年史編纂委員会編『キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟1986年。

キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会『キリスト教学校教育同盟百年史』キリスト教学校教育同盟、2012年。

キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会『キリスト教学校教育同盟百年史 資料編』キリスト教学校教育同盟、2012年。

聖和史刊行委員会編『Thy Will Be Done 聖和の128年』学校法人関西学院、2015年。

聖和保育史刊行委員会編『聖和保育史』聖和大学、1985年。

聖和幼稚園100年史委員会編『聖和幼稚園100年史』聖和大学1991年。

西南女学院短期大学開学50周年記念誌編集委員会編『西南女学院短期大学開学50年』西南女学院短期大学、2000年。

北陸学院100年史編集委員会編『北陸学院百年史』北陸学院、1990年。

文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに、1979年。

立花富と南信子の保護者へのお便りに見る保育観の考察

表2・立花富略歴

西暦年	立花富年齢	立花富事項
1904	0歳	2月14日立花富生まれる
1916	12歳	4月：愛知県立第一高等女学校本科第一学年入学
1920	16歳	3月：同校卒業 4月：名古屋市私立金城女学校専攻科文科入学
1921	17歳	3月：同科一ヶ年課程修了
1922	18歳	4月：大阪市私立ランバス女学院保育専修部入学
1924	20歳	3月：同部卒業 4月：広島市鷹匠町私立広島女学院附属鷹匠町保育園保母（1927年3月まで）
1927	23歳	4月：大阪市私立ランバス女学院附属幼稚園保母
1928	24歳	4月：同園主任保母（1931年6月まで）
1931	27歳	7月：ランバス女学院より米国テネシー州ナッシュビル市ピーボディ師範大学にて児童発達、児童発達心理学、及びナースリースクール学を専攻（1932年12月まで）
1932	28歳	
1933	29歳	米国イリノイ州エバント市ナショナル師範大学にて一般初等教育研究（1933年8月まで） 9月：ランバス女学院附属幼稚園主任保母、保育専修部講師（幼児保育の科目）兼任（1941年3月まで）
1941	37歳	3月：ランバス女学院及附属幼稚園廃止、同校及同園辞職 4月：西宮市私立聖和女子学院保育学部講師及び幼稚園部主事（1945年3月まで）
1945	41歳	3月：結婚につき退職
1948	44歳	戸畑中原地区及び市婦人会協議会会長（1952年まで）
1950	45歳	戸畑市人権擁護委員（1952年まで） 戸畑市社会教育委員（1953年まで）
1951	47歳	福岡県小倉市西南女学院短期大学講師（1957年3月まで） 福岡市香蘭女子短期大学講師（兼任）（1977年3月まで） 福岡家裁小倉支部調停委員（1978年まで）
1952	48歳	戸畑市教育委員（1959年まで）
1953	49歳	戸畑更生保護婦人会会長（1968年まで） 福岡保護観察所戸畑区保護司（1977年まで）
1957	53歳	4月：西南女学院短期大学保育科助教授（1965年3月まで）
1961	57歳	福岡地裁小倉支部委員（1978年まで）
1965	61歳	4月：西南女学院短期大学保育科教授（1983年3月まで）
1992	88歳	10月29日召天。

先行研究においては、立花富の没年不詳のため確認に至っていなかったが、2022年8月29日・30日に行った現地調査（西南女学院大学短期大学部資料室）より資料発掘及び立花富の戦後の消息確認に至った。